

## 雲南省における棚田とハニ族のエスニシティ

著者	孫 潔
雑誌名	東北アジア研究
巻	14
ページ	123-145
発行年	2010-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/48285">http://hdl.handle.net/10097/48285</a>

# 雲南省における棚田とハニ族のエスニシティ

## Rice Terrace and Ethnicity of Hani in Yunnan

孫 潔 (Jie SUN)\*

キーワード：雲南省、棚田、ハニ族、エスニシティ、世界遺産

Keywords : Yunnan Province, Rice Terrace, Hani, Ethnicity, World Heritage

### 1. はじめに

55の少数民族を抱えている中国では、「OO民族」として一括された中国の一民族は、実際には多様な人々を含むものであり、様々な「支系」を有している。例えば、本論の研究対象であるハニ族には、ハニ、ザニ、ヤニ、ロメイ、アカなどの多くの自称集団を含んでおり、中国、タイ、ミャンマー、ラオス、ベトナムに、国境を越えて存在している〔稲村1996：59-60〕。しかし、1950年代に行った全国的な「民族識別工作」から、1980年代以後の民族文化を復興し再発見する動向まで、政府や民族知識人などにより、往々にして「支系」の問題を隠しながら、「ひとつの民族」には「ひとつの文化」を持っているという「民族」を創出し、「民族文化」を構築してきたと多くの学者が論じている〔稲村1996：58-82；瀬川2001：1-25；横山2004：181-203など〕。これらの研究では、それぞれの少数民族が中華人民共和国成立以後の民族政策の中でいかに生成され、「名づけ」されてきた過程を検証し、また、民族文化復興運動において、どのような表象が選びとられ、当該民族の「特色」にまつわる言説がいかに構築されてきたのかを明らかにした。

綾部は、エスニシティは民族集団 (ethnic group) と常に互換的に用いられてきた概念であると指摘している。また、彼は民族集団を扱った人類学的ないしは社会学的研究を分類したイサジウ (W. W. Isajiw) の研究内容を取り上げ、民族集団について、最も多く用いられる属性は、①共通の出自、②共通の文化、③宗教、④人種、⑤言語となっている、と述べている〔綾部2002：103〕。従って、ここでは従来エスニシティに関する研究として、言語や出自、宗教など、民族文化の独特の要素が多く提示されている。一方、上述に提示されてきた「共通の文化」は一民族集団の持つ重要な属性であるものにしても、どこまで共通であるのかについて、その境界線はまだ不明である。中国では、いくつかの民族集団は「共通の文化」を持っており、政治的・経済的な力学に左右されながら、他民

---

\* 東北大学東北アジア研究センター専門研究員

族を排除し一つの民族集団のシンボルとなる事例は稀なことではない。本論は言語や宗教などの民族集団のユニークな要素と異なり、周囲の民族も共有するような生活基盤となる棚田の生態文化が、いかにハニ族のエスニシティのシンボルとして構築されてきたのかの研究として、従来のエスニシティ論に対して、新機軸を提供しようと試みる。

一方、2000年代に入り、中国においては「申遺（世界遺産リストへの登録申請）」活動が非常に盛んになっている。「世界遺産申請ブーム」の登場は、発展途上国にとって、西欧や先進国が支配する世界の政治的・経済的なシステムの中に自らの位置づけを探る試みともいえる。これまで知名度の低かった文化や、あまり周知されていなかった「民族文化」が、世界遺産登録を申請することを通して、一躍新しい文化資源としてその価値を見出され、自民族文化の価値を格上げさせようとしている。例えば、世界遺産となったフィリピン・コルディリエーラの棚田群は山岳民族イフガオが営んでいる。イフガオは、各種の農耕儀礼を統括する指導的役割を果たしている〔本中 1997 : 36〕。また、中国雲南省の「麗江古城」では、1997年に世界遺産として登録されたことを通して、そこに居住しているナシ（納西）族は、「古城」とともに国内外に注目されてきた〔宗 2006〕。学者たちが検証してきた、正統性のもつ、且つ優れた民族の「独特」の文化は、常に政府の主催した遺産登録申請活動に際しても、引き続き「支系」に関する多様性を無視しつつ、学術的な根拠を携えるものとなっている。本論は、中国雲南省元陽県にある棚田をハニ族の独特な文化のシンボルとして代表させようと企図し、さらに「紅河ハニ棚田」という名称で世界文化遺産登録を申請している事例を考察し、現代中国における民族的なアイデンティティーの新しい展開を検討することが目的である。

棚田とは、自然環境により沿い、山のラインに従って階段状に開拓された耕地である。このような形態の耕地は、昔から現在に至るまで世界中に多く見られる。例えば、日本の千枚田、フィリピンのコルディリエーラ、中国の広西チワン族自治区にある竜脊棚田、雲南省南部紅河ハニ族イ族自治区の棚田などがそれに該当する。棚田の定義に関して、日本農水省では「傾斜度が20分の1（水平距離を20メートル進んで1メートル高くなる傾斜）以上の水田を「棚田」として認定する」と明確に認定している。それに対して、日本以外の地域では、所見の限りでは棚田の定義に関する具体的な数字は見当たらない。本稿の研究対象とする中国雲南省南部に位置している元陽県（図1）は、2006年末のデータによると、棚田の面積が約1.27万ha（総耕地面積の約53%に相当）あり、標高170mから標高1980mの広い範囲に分布している。元陽県は紅河ハニ族イ族自治州（以下「紅河州」と略す）に属し、15の郷・鎮から構成されている。2006年時点において、元陽県の総人口は約380,609人で、主にハニ（哈尼）族、イ（彝）族、タイ（傣）族、ミャオ（苗）族、ヤオ（瑶）族、チワン（壮）族及び漢族など7つの民族の人々が居住しており、少

数民族の人口が総人口の88%を占めている。そのうち人口数が最も多いのはハニ族で、約53.04%を占めており、次いでイ族が23.97%となっている。また、元陽県の総人口の約95%が農業を営んでおり、彼らの生活の基盤は険しい高山の傾斜地に開かれている棚田である。特筆したいことは、元陽県の棚田は88%以上が標高800mより高いところに位置し、紅河州地域の中では最もその面積が大きいという点である。

近年、この地域の棚田は「<sup>ハニ・ティン</sup>哈尼梯田（ハニ棚田）」という呼び名が定式化している。それは、ハニ族が棚田を耕耘し、棚田作りに長けていると一般的に認識されており、特に、棚田は現地民族が生存環境へ適応するという物質的な適応であるとともに、地域的な視点から考えると、現地民族によってそれぞれ著しい個性と文化的な特色をもつ適応でもあると思われる。しかし、今日ではハニ族のエスニシティの視覚的表象とでもいうべき存在となっている棚田も、果たしてどこまでハニ族独自のものと言えるのだろうか、そしてそれが何故にハニ族の人々の「知恵」と「勇気」のシンボルとしての地位を獲得するに至ったのだろうか。本稿では、中国雲南省元陽県の棚田に焦点を当てて、棚田がいかに関ハニ族の特殊性、独自性を象徴するものとして形成されてきたかという過程を明らかにする。資料としては、部分的に1980年代後半から相次いで出版されている研究報告に依拠しているが、とりわけ雲南省紅河ハニ族イ族自治州で2006年—2007年に行った現地調査に中心的に依拠することとする。

## 2. ハニ族の形成過程

ハニ族（Hani）は中国西南部の少数民族の一つで、人口約143万人（2000年統計）である。国境線を越えて分布する民族で、中国国内以外ではビルマ、ラオス、タイ、ベトナムにも居住しており、アカ（Akha）と自称している。また、アイニー（愛尼）、イツ（奕车）などの支系を持ち、チベット・ビルマ語族のイ語支系に属している。中国雲南省紅河地域のハニ族の起源については、中国の学界では一般的に四つの説がある。それは①紅河兩岸地域の先住民、②北方の遊牧民族と南方の稲作民族とが融合して出来た民族、③北方の羌氏系の民族が移住してきたものという説、④中原の漢民族が移住してきたという説である〔黄2007：13-17〕。中でも、③番の言説が有力であるとされている。それによると、紀元前3世紀前後の春秋戦国時代に、秦朝の勢力が拡大し、圧力を受けた羌氏系の一部が南下して、四川省の大渡河流域に移り住み、「和夷」と称した。その後、戦乱などによりさらに南下し、隋唐（紀元6世紀）以降になって、哀牢山南端の紅河流域に定住し始め「和蛮」と呼ばれるようになったという。彼らは、まず傾斜のゆるい斜面を開墾して畑地とし、一定期間耕作をした後で平坦な畑地に改良し、その後で灌漑条件を整え、畑地を「熟畑化」してから、最後に改めて水田にしたという〔角2003：51-56〕。つまり、

③説を採れば、この地域に定住しているハニ族の先祖の生活基盤は、遊牧文化から焼畑文化に転じ、また焼畑文化から山地棚田による稲作文化に転換したものと認識される。この言説も、棚田はハニ族に専有されていることを正当化する学術的なサポートになっている。しかし、元木らは元陽の棚田の例を取り上げ、「棚田は極めて組織的な形で造成されたものである」とし、また「棚田は焼畑から自生的に生まれたものではない」と指摘した〔元木・ピラルディン 2003 : 181-204〕。即ち、棚田はこの地域の特定の気候、降水量、標高など自然環境に順応して展開されてきたのである。

上述したように、ハニ族の起源に関する解説は様々であり、まだ定説になっていない。ハニ族の族源、及びハニ族と棚田との関係についての研究は、更に歴史学、特に農耕史の分野における考古資料の分析に待つべきものであり、本稿はこの点に関して新事実を付け加えるものではない。ただし、そうした世界中でよく見受けられる棚田を特定の民族集団に結びつけ、ハニ族のシンボルであるとみなそうとする思考のあり方、即ちハニ族に棚田を帰属させることの正当性自体が、検討の対象とされねばならないと筆者は考える。

まず、現在の「ハニ族」が、いかに一つの民族集団として形成されてきたのかを考察しよう。中国における 55 の少数民族が、1950 年代に全国で行われた民族識別工作によって「名付け」されてきたことは多くの学者が分析しているところである〔栗原 1989、加々美 1992 など〕。民族識別工作は、「民族区域自治」のために民族を創り出すという中国独自の重要な出来事であった。林は、1953 年のセンサスの際に、雲南省だけで少数民族側から出された民族名称が 260 以上にものぼったと述べている〔林耀华 1984 : 1-5〕。1954 年から中央民族事務委員会が雲南に調査団を派遣し、個別に民族識別を進めた。そこで「民族識別」の基本的な客観的基準として採用されたのは、スターリンの四つの基準「言語、地域、経済生活、文化心理素質（民族意識）」であった。しかし、実際の「民族」が以上の基準すべてに収まるわけではない。また、四つのうちのいずれかを選択的に強調し、あとは識別される側の主観による話し合いで行われてきたことも周知の事実である。したがって、中国における「民族」とは極めて政治的な構築物であり、「上からの国民形成」であり、恣意的に作られてきたと批判する言説もある〔毛里 1998 : 74〕。

ハニ族の民族識別においては、「言語」がもっとも決め手になっていると稲村は指摘している。1953 年以前はほとんどの文献では「窩<sup>ウ</sup>ニ<sup>ニ</sup>族」の名が挙げられており、民族識別以前の漢籍に漢字「哈<sup>ハ</sup>尼<sup>ニ</sup>族」が使われたことはほとんどない。1953 年 12 月 25 日に、紅河自治区第一回各民族人民代表会議（出席人数 415 人）によって「哈尼族」の名称が決議され、窩<sup>ウ</sup>ニ<sup>ニ</sup>は哈<sup>ハ</sup>ニに置き換えられ、1954 年 1 月 1 日に雲南省紅河哈尼族<sup>ハニ</sup>族自治区成立以降は「哈尼族」が使われるようになっている〔稲村 2002 : 176-177〕。その理由は、ハニ（Haqniq）というのは実際の自称であり、「窩<sup>ウ</sup>ニ<sup>ニ</sup>族」は蔑称であるからだという〔李 2000 :

1]。しかし、言語を識別の標準にしても、ハニ族とイ族、ハニ族とラフ族はいくつか類似点を持っている。ハニ、イ、ラフ、リス、ナシは同じイ語支系に帰属しており、単一の民族からどのように分離し、どのように各種の名を持った集団と認識させられ、言語的にはどのような関係にあったのかということに関しても、さらに研究が必要であろう〔費1988:184〕。また、民族識別の基準である「地域」に関しては、これらの人々が国境を越え、ビルマ、タイ、ラオスにも居住しており、すべて雲南省内に収まっているわけではない。一方で、「経済生活」については、当初モルガンの図式に従って分けられた、棚田を開墾する元陽地域のハニ族と、焼畑を営むシーサンパンナ（西双版纳）のハニ族それぞれの経済生産方式の差異については、これらは「民族内部の発展不均衡」としか捉えられていなかった。最後の「心理素質」は、『雲南少数民族社会歴史調査資料汇编（三）』の記載によると、氏族の残余、父子連名制、選好的交差イトコ婚、6月の神樹の祭礼、モピmoqpilと呼ばれる祭司職などが挙げられている。しかし、氏族制度、6月の祭礼、モピの存在などはチベット＝ビルマ語系の諸民族に多かれ少なかれ見られるし、選好的交差イトコ婚がハニ族全体にも共有されているとはいいがたい〔稲村2002:176〕。以上のように、「ハニ族」という「民族」は様々な問題点を抱えていながら、「民族識別工作」によりエスニック・カテゴリーとして創出されてきた。

1954年に開かれた第1期全国人民代表大会は、民族区域自治制度を「中華人民共和國憲法」（以下「憲法」と略す）に記載した。この政策原則に基づいて、1954年1月1日に雲南省紅河哈尼（ハニ）族自治区人民政府が成立した。その後、1957年11月18日、蒙自専区と紅河哈尼族自治州が合併し、紅河哈尼（ハニ）族彝（イ）族自治州が成立した。特筆したいことは、紅河州においては、1957年から現在に至るまで、イ族の人口がハニ族より多いということである。1954年の第1回人口センサスのデータによると、紅河州の総人口が167.42万人で、ハニ族が23.49万人、イ族が39.48万人であった〔《紅河哈尼族彝族自治州志・卷一》1997:202〕。2005年、全州の総人口は406.35万人であり、ハニ族が69.51万人、イ族が97.62万人であった〔《紅河州年鑑》2006:29〕。それにもかかわらず、民族自治州の名称に関して、民族名称としての「ハニ族」は「イ族」より先に並んでいる。その理由に関して、イ族の人々は一様に以下のように語っている。当初、四川省の涼山彝族自治州（1952年4月）がすでに成立しており、雲南省においても楚雄彝族自治州の成立（1958年4月）が検討されていた。しかし、全国においてイ族の名を冠する自治州がすでに存在していたのに対し、ハニ族の名を冠する自治州は存在していなかった。そのため、紅河自治州の成立に際し、「ハニ族」という名を「イ族」より先に掲げたということである。当初、平等、団結、互助の民族関係を発展させる目的で自治州の名称が定められたが、結果的には、この地域においてハニ族をイ族より行政的に優先させ

ることを法律で固定化した。さらに、この名称が現在新たな民族争議を引き起こしている。例えば、『民族区域自治法』により、自治州の州長は区域自治を実行する民族の公民しか担当できないので、ハニ族が主でイ族が従という図式はイ族の官僚が州長となる道を封じたことを意味する。また、現在行われている世界文化遺産登録に関しては、登録名称が一方的にハニ族を偏重し、「ハニ棚田」で正式にユネスコへ提起された。従ってイ族の住民の側からは、もし 50 年代に度量が広くなければ、今は「イ族棚田」となっていたかもしれないという不満もよく聞かれる。

### 3. ハニ族のエスニシティと棚田

#### (1) 棚田の創造者＝ハニ族という言説

ハニ族の民族知識人を中心とした多くの研究者は、「ハニ棚田（哈尼梯田）」、つまりハニ族が棚田の所有者であり、棚田がハニ族のシンボルであることを、様々な側面から論じてきた。中でも、歴史文献学的に「ハニ棚田」文化の起源を探ることは最もよく行われている。こうした作業が行われる背景について、瀬川は「民族集団や文化が本来的にもっている可能性のある流動性に対し、文化史家や民族学者が往々にして過度の構造化を志向し、結果として他には還元不可能な独自性と持続性を備えた民族・文化の系統モデルに帰着しがちである。特に、中国の場合には、知識人一般の中に歴史偏重の思考回路が潜在しており、このことが文化の「系統」や「起源」の解明へのとりわけ強固な志向を生み出す背景となっている」と指摘している〔瀬川 2001 : 15〕。

「ハニ棚田」と表記された一番早い記録は、1958 年から 20 数年掛けて編纂され、1985 年に出版された『哈尼族簡史』である。この本の第七章第五節に、「創造梯田（棚田を創造する）」というタイトルの文章が掲載され、棚田の創造者がハニ族であると初めて論じられている。『哈尼族簡史』はまず『尚書・禹貢』という古典からアプローチし、ハニ族の稲作の歴史を辿った。雲南ハニ族の棚田に関する最初の歴史文献であるとされる春秋戦国時代の『尚書・禹貢』には、「蔡、蒙旅平、和夷底績。厥土青黎、厥田惟下上、厥賦下中三錯。」（蔡山、蒙山までの道が整備され、（和夷）地域の水利も納められた。（和夷）地域の土は青黒で、その田は下の上のランクに属するが、その租税は下の中のランク、また雑出は下の下、下の上のランクとして支払われており、租税と雑出がそれぞれ異なっている）と記述されている。そして、『山海経・海内経』、『史記・西南夷列伝』二冊も取り上げ、「西南夷」とされたハニ族の先祖が西南地域の黒水流域において、大昔から稲作を開始していたことが明らかになり、それゆえ稲作の長い歴史を持っていると記されている。特に、唐代の『蛮書・雲南管内物産』の記述が引用され、「蛮治山田、殊為精好」（蛮人は、山地の耕地を治めることに非常に長けている）という記録から、技術の面で山地の耕地を

治めることに「殊為精好（非常に長けている）」なのはハニ族のみであるとされ、ハニ族が他民族より棚田に関し優れた技術を持っていると強調している〔『哈尼族簡史』1985：111-114〕。

『哈尼族簡史』は、中国政府が1956年から全国的に少数民族に関する社会・歴史を調査し、1959年末に初稿を完成させた、中国各少数民族の概要を紹介する『中国少数民族簡史叢書』の一冊である。『哈尼族簡史』に掲載されている歴史的な文献資料は、近年盛んに学者たちに引用され、歴史的な正当性を持つ「起源」として、最初の棚田の開墾者がハニ族であるという主張を支えている〔王清華1999：1-2、王尔松2005：2-3など〕。例えば、『尚書・禹貢』に記述されている「蔡、蒙旅平、和夷底績。厥土青黎、厥田惟下上、厥賦下中三錯。」は、以下のように解釈された。「和夷」はハニ族の通称とされ、「下上」が棚田の形状に合っていることを根拠とし、「棚田だと断定していないが、「下上」の意味を吟味すると、棚田のことではないだろうか」と黄は推測している〔黄2007：120〕。また、『哈尼族簡史』の記述に見習い、学者たちは他の歴史的文献から現在のハニ族に当てはまる民族集団が棚田を開墾した記述を探り出した。例えば、明代の『土官底簿』、清代の『臨安府志・土司志』、『雲南通志』などにも多少そのような記録が残っているとも言われている〔李2000：3、黄2007：121など〕。

その後1988年に、雲南省社会科学院の王清華（注1）が、『民族調査研究』という学会誌上に、「ハニ族の棚田文化」とのタイトルの論文を発表した。これをきっかけに、「ハニ棚田文化」という概念は徐々に学界に浸透してきた。さらに、1999年に王清華は『棚田文化論』という本を出版した。この本の中には、ハニ族は中国において棚田の創造者であり、またこの農耕方式を最も長く保存し、さらに発展させる推進者であると記載されている。そして、棚田はハニ族の年中行事、生活方式、風俗習慣、宗教信仰などと深く関わっており、ハニ族の文化の独自性は棚田を中心に展開されているとも彼は主張している〔王清華1999：7-12〕。1993年3月に、元陽県において、ハニ/アカ文化をめぐる「第一回国際ハニ/アカ文化学術シンポジウム」が行われた。それ以来三年毎に「国際ハニ/アカ文化学術シンポジウム」が開催され、学者たちがハニ族文化に関する様々な学術的研究報告を行っている。第一回のシンポジウムで提出された80本の論文のうち、40本ほどが各側面からハニ族の文化と棚田に関し言及するものであった。また、2002年12月に行われた「第四回国際ハニ/アカ文化学術シンポジウム」においても、提出された158本の論文中、80本が棚田文化に関し論述している。これらの論文から、棚田は徐々にハニ族の「知恵」、「勤勉」、「勇敢」の物質的なシンボルとなり、自民族のアイデンティティーを強化する手段として利用されるようになったことがわかる。稲村の研究によると、中国国内で出版された出版物の中には、「棚田文化」が西双版纳州のアカや、金平などのゴジョと呼ばれている



焼畑農耕を営む者を排除し、「哈尼文化（ハニ文化）」とともに大々的に表出されてきたのだという〔稲村 2005 : 269-271〕。

## （２）棚田と他の民族

前節で論じたように、棚田はハニ族のみに所属する独占物となり、ハニ棚田文化は正統且つ優れた文化であるかのように大いに語られてきた。しかし、地形に沿って開墾された棚田は世界中でよく見受けられる田圃のかたちである。棚田を一見する限りでは、それがどんな民族のシンボルであるかは不明である。また、いずれの棚田も、ただ環境に適応するため、生き抜くための一戦略としての性格をもっている。実は、雲南省紅河州地域に限っても、ハニ族だけではなく、イ族、ヤオ族、ミャオ族なども、棚田の耕作に従事している。さらに、日本の棚田の定義で考えると、一部のタイ族もその耕作者に含まれる。本節では、歴史文献、現在の学者の研究報告及び当地に生活している人々の言説の三点から、紅河地域における棚田と他の民族との関わりを整理してみたい。

まず、歴史文献においては、ハニ族以外の他民族が棚田を耕作している記述も見受けられる。例えば、『雲南彝族社会歴史調査』によると、元陽馬街地域の彝族は、「半山区（山腹）」に定住していたため、棚田を生活の基盤に生き抜いていたと記載されている〔『雲南彝族社会歴史調査』1963 : 227-241〕。また、『哈尼族簡史』とはほぼ同じ時代に編纂された『彝族簡史』は、1959年に初稿を完成させており、1987年に出版された。同書には、イ族が棚田を創造したという記述は見られないが、イ族が平地ではなく、山で耕地を耕作しているという記録は数箇所にある。例えば、「イ族が標高 2000—2500 メートルの範囲に分布している」〔『彝族簡史』1987 : 4〕、そのため、イ族は農業の営みに長い歴史を持っており、イ族の先祖が「山田（山地の耕地）」を治めることに「殊為精好（非常に長けている）」〔『彝族簡史』1987 : 196〕。即ち、『彝族簡史』も巧妙に「蛮治山田、殊為精好」を引用し、イ族の農耕の歴史を証明していると思われる。特筆したいのは、『哈尼族簡史』では、「蛮治山田」の「蛮」がハニ族の先祖である「和蛮」となっていることである。一方、『彝族簡史』では、「蛮治山田」という記述そのものは当たらないが、「（イ族の先祖が）治山田、殊為精好」とあるという図式に当てはめると、その「イ族の先祖」が「蛮夷」の「夷」に当たるとも解釈できるだろう（注 2）。つまり、同じ記述は異なる解釈により、異なる民族の歴史記述として位置づけられている。

そして、現在の学者の研究によれば、ハニ族を含む多数の民族が棚田を耕作している事実が支持されている。例えば、張文と王声躍の研究によると、雲南省においては、ハニ族、チワン族、ワ族、イ族、ペー族が山の斜面に棚田を耕作し、灌漑農業を営むことを通して、食物を確保している〔張文・王声躍 2006 : 107〕。また、西谷によれば、同じ紅河

州の金平県者米谷では、アールー（イ）族、ヤオ族、タイ、クツォン（ラフ）族の人々にとって棚田で水田耕作を行う農耕生産は各民族の共通点である。その上で、地形や気候の複雑さは多様な生態環境を生み出し、アールー、ヤオ、タイ各民族の生業戦略における様々な差異へとつながってきたと指摘している。例えば、タイ族とヤオ族が所有する棚田は、灌漑用水が豊富であるのに対し、アールー族の棚田では水が常に不足状態である。そのため、水が豊富なタイ族の村では、灌漑水路の維持管理費は各家の所有する水田面積が基準になるのに対して、アールー族の村では水の分量によって厳密に管理されている〔西谷 2007 : 335-373〕。

元陽県における各民族の住み分けは標高に依拠しているとされる。紅河の河谷地域から約 1000 m まではタイ族、チワン族が居住する区域となっており、1000 m から標高 1700 m、1800 m まではイ族とハニ族が居住している。さらに標高 1800 m 以上はミャオ族、ヤオ族などが住んでおり、河谷から哀牢山の山麓まで標高の高さによりそれぞれが居住する形となっている。彼らの生活の基盤は主に傾斜地に開かれている棚田である。元陽県の旧県政府の所在地新街鎮では、三日に一度、「五天両頭市」（市場）が開かれ、周辺に居住している少数民族が集まり、農産物を中心とした、様々なものの売買を行っている。ここに集うハニ族、イ族、ミャオ族、ヤオ族の人々に聞くと、ほとんど棚田を耕しているとの答えが返ってきた。その上さらに、同じ標高の地域においても、様々な民族が雑居していることがわかる。例えば、元陽県内における猛品ブロックの棚田は主にイ族とハニ族が耕しているように、ハニ以外の民族も棚田で水稻耕作を行っている。そのため、確かに標高差により様々な民族が集中居住しているが、それを理由として、棚田の耕作者を山腹に居住しているハニ族だけに限定することは適切ではないと思われる。

以上のように、紅河地域において、多くの民族の人々が昔から現在に至るまで、棚田で水田農業を行っていることが伺える。しかし、それにも関わらず、ハニ族以外のイ族やヤオ族が棚田と結び付けて語られることは極めて少ない。さらに、「ハニ棚田」という固定化した図式に対比すべき「イ棚田」、「ヤオ棚田」は一切見えない。他民族が棚田を耕している記録を目にしても、ただ農耕方式の一つとして見なされ、ハニ族のように棚田が民族のシンボル、エスニシティと関連づけられて論じられていない。また、棚田の耕作技術についても、ハニ族が他の民族より優れているという言説は『哈尼族簡史』の記載以外に、ほとんど見当たらない。したがって、一文献だけで耕作技術の優劣を判断することは十分ではないと筆者は考える。

### （3）「哈尼棚田」の正当化

紅河州地域において、ハニ族以外の民族の人々も棚田を耕作していることは、ハニ族の

知識人を含めて誰でも周知の事実である。それにもかかわらず、ハニ族の民族知識人は歴史的に「ハニ棚田」の起源を辿ることにより、「ハニ棚田」を正当化し、また棚田の面積および耕作するハニ族の人数によって、他民族よりハニ族が絶対的な優勢を保ち、棚田の所有権を持っていると主張する民族知識人もいる。即ち、「蛮治山田、殊為精好」(蛮人は、山地の耕地を治めることに非常に長けている)という記述はいかにハニ族だけに当てはまるものであることを証明しようとしてきたのである。

『哈尼族簡史』の記載によると、雲南における多くの山地民族は棚田を開墾することができるが、棚田の階段の数、耕作の技などから考えてみると、最も優れているのはハニ族である [『哈尼族簡史』1985: 111]。この記述を踏まえ、黄は「哀牢山地域における棚田の分布地域はハニ族の居住地域と一致しているので、特に現在、棚田の多く分布している墨江、紅河、元陽、緑春四県においては、ハニ族の人口がそれぞれ 58%、76%、54%、88% となり、他民族より圧倒的に多い。したがって、地理的な分布においても、ハニ族が棚田の創造者であり、所有者でもあると考えられる」と主張している [黄 2007: 121]。

また、李は、同じ地域に居住している他民族をハニ族ほど緊密に棚田と関わっていないと論じている。例えば、タイ族の定住している河谷地域は、棚田を形成できる地理的な要因を備えていない。また、ミャオ、ヤオ、ラフ族は山地民族であるが、歴史上水稻をほとんど栽培していない。彼らは、解放後、土地改革により水田を分配されてから、水稻を耕作し始めたが、その数は多くはない。さらに、イ、チワン族は棚田耕作の歴史を持っているものの、棚田の多く分布している紅河流域では、ハニ族より人口が著しく少ない。そのほか、紅河州全体の人口はイ族がハニ族より多いが、殆ど棚田地域に住んでいない。以上の理由により、「哈尼棚田」という呼称が、「哀牢棚田」、「元陽棚田」、「紅河棚田」よりも相応しいと述べられている [李 2000: 3-4]。

さらに、最初に「ハニ棚田」を提起した『哈尼族簡史』の編集者は劉堯漢教授であり、有名なイ族の学者であることを強調している [黄 2007: 183]。1992 年に訪れてきたフランス人のカメラマンであるヤン・ラマ (Yann Layma) の撮影した写真、ドキュメンタリー『山の彫刻家 (The Mountain sculptors)』も内容的にハニ族の棚田を表しているとの記述は多くの出版物で見られる [哥布 2001: 149、林成貴 2005: 406 など] (注 3)。つまり、ハニ族が棚田の創造者、所有者であることは、自民族だけではなく、イ族の学者や外国人など他者によっても表象されていたからこそ、一層の正当性が認められるのだ、という主張である。

前述したように、雲南省紅河州における多民族が棚田を生活基盤として耕作しているにもかかわらず、ハニ族の民族知識人たちは歴史的文献によって「ハニ棚田」文化の起源を遡りつつ、ハニ族以外の民族を「棚田文化」から除外してきた。すなわち、「棚田」とい

う文化要素はハニ族のエスニック・バウンダリーをなすものと見なされるようになり、ハニ族伝統の「ハニ棚田」が創り出されてきたのである。

#### 4. 「ハニ棚田」のブランド化—世界遺産申請登録への歩み

2000年代に入り、中国においては「申遺（世界遺産リストへの登録申請）」活動が非常に盛んになっている。2005年11月、韓国の江陵端午祭が世界無形文化遺産として登録された結果、端午の節句（陰暦5月5日）は自国の伝統的な祭りであり、歴史上中国から韓国に伝わったことを主張している中国は衝撃を受け、全国的な「世界遺産申請ブーム」に一層拍車がかかった。というのは、一日も早く世界遺産登録を申請していないと、他のものも他国に申請されてしまうかもしれないと不安が募ったからである。既に「中国の世界文化遺産暫定リスト」に登録し、中国からユネスコに推薦を予定している遺産の件数、及び今後世界遺産として申請しようと試みている件数は数え切れないほど多い。元陽の棚田地域も中国における「申遺」ブームに便乗し、1999年から政府が本格的に世界遺産登録の申請活動を行ってきた。即ち、従来「蛮夷の地」である辺境にある棚田地域は、文化的景観として世界遺産登録を申請することを通して、知名度の向上を図ると同時に、自民族文化の価値を格上げさせようとしていると理解できる。

元陽の棚田を世界遺産に登録させる経緯を遡ってみると、雲南社会科学院に属している史軍超と緊密に関わっている。史軍超はハニ族の耕している広い棚田の地域まで足を伸ばしており、ハニ文学史、ハニ文化について、20数年間継続的に研究している有名なハニ族の学者である。棚田を世界遺産登録へ申請する契機について、史は以下のように記している。

1995年10月、史軍超はフランス人の人類学者オーイェナーに、元陽県の「老虎嘴<sup>ラーフズイ</sup>」という場所まで案内した。ちょうど稲の収穫期と重なり、見渡す限り、棚田にある金色の稲が夕焼けを反射し、波のように広がっていた。オーイェナーはその景観を見たとき、深く感動し、「ああ、どうしてこんなに素晴らしいのだろうか～信じられない～」と感嘆する以外、言葉がでなかった。オーイェナーはアフリカ、南アメリカ及び日本で調査を行ったことがあり、これらの地域にも棚田はあるが、元陽の棚田と比べると、いずれもただの小さい田圃に過ぎないとみなした。彼は元陽の棚田を大地の彫刻であると評価し、こんな素晴らしいものをなぜ世界文化遺産に申請しないのかと登録申請を強く勧めた。オーイェナーとの出会いをきっかけに、史は初めて世界遺産登録のことを知り、元陽の棚田を世界遺産リストに登録しようという意欲に駆り立てられたということである[史2001:4-5]。

史は1995年から雲南省にある棚田地域、元陽、金平、建水、昭通、大理を調査、その後広西チワン族自治区の龍勝棚田地域など全国的に有名な棚田地域を巡り、またフィリピ

ン、メキシコ、日本など他国の棚田に関する資料を研究した上で、1999年、最初に元陽の棚田を「世界遺産」に登録すべきだと提起した。1999年1月、雲南省政府が主催した第一回「雲南省建設民族文化大省研讨会（雲南省が民族文化大省を建設しようとするシンポジウム）」にて、史は《建設“元陽哈尼族梯田文化奇观保护与发展基地”（元陽ハニ棚田文化景観を保護及び発展させる基地を建設しよう）》という論文を提出した。この論文には、紅河州の元陽地域でハニ族が耕している棚田の歴史と現状が紹介されているとともに、世界文化遺産リストに登録しようと、国家関係部門、ユネスコへ提出したい旨が記されている[黄2007:185]。

文化的景観としての棚田地域は、既にフィリピンのコルディリエーラ山脈にある棚田地域が1995年に世界文化遺産として登録されている。史は、紅河地域の棚田を世界遺産に登録すべきだと主張する主な理由として、紅河棚田が、フィリピンのコルディリエーラの棚田群と比べ、より唯一性、独特性、代表性を備えている上、棚田の総面積、階段数、スケールなどでも圧倒的に凌いでいることを挙げている。例えば、コルディリエーラの棚田群の面積がおよそ2万ヘクタールであることに對し、紅河州の棚田地域は4.7万ヘクタールである。つまり、面積は倍以上であり、それ故より壯観である。また、棚田の階段数も景観の壯観さに大きく関わる。棚田は急な傾斜地を耕し階段状に作られており、棚田の階段の数により、傾斜面の勾配、山の険しさが推測できる。紅河地域の棚田の勾配は大体15°~75°あり、ひとつの斜面には、数百段から3000段（注5）が築かれているのに対し、コルディリエーラの棚田群は、約800段しかない。この点でも紅河のスケールはコルディリエーラを凌ぐ。更には、貴重な文化遺産であるコルディリエーラ棚田自体が、今や崩壊の危機に瀕している。村の若者たちは棚田の耕作に関心がなく、大ミミズの繁殖で土壌が軟化し、表土の流出や土砂崩壊が続いている。2001年には、この事実を踏まえて、ユネスコの世界遺産の危機遺産へも登録されている。一方、紅河地域の棚田は、現在もハニ族などの少数民族によって耕作され、少数民族の生活基盤であり、「生きている棚田」とも言われている。以上のように、顕著かつ明示的な理由により、雲南省の紅河棚田は世界遺産への登録を申請すべきだと主張がなされたのである。

史の提言は紅河州政府に非常に重視された。1999年3月25日には、紅河州ハニ族文学研究会が編集した『梯田文化報』という地方紙にこの文章の全文が掲載され、紅河州内で大きな反響を呼んだ。政府は史を始めとする数人の学者に申請計画を準備させ、本格的に申請活動に取り組んできたのである。

先述した申請活動のプロセスに鑑みると、学者である史の提言を受け入れ、政府が世界遺産登録への申請活動に取り組んできた経緯が伺える。世界遺産への登録問題は、地元で棚田を耕作している地域住民の意見というより、むしろ国家的、各レベルの政府

的、学者的な作為であるといえよう。『红河州人民政府关于红河哈尼梯田申报世界遗产的可行性论证报告（红河州人民政府が红河ハニ族棚田の世界遺産を申請する可能性に関する論証報告）』には、世界遺産として申請すべき価値と意義が明確に記載されている。その価値と意義は以下の6点に要約される。第1に、红河州の国際知名度が高まる。第2に、红河州の経済発展を促進する。第3に、民族文化を支柱産業とする红河州を建設する。第4に、红河州及び雲南省の観光業を発展させる。第5に、「森一村一棚田一水路」の四位一体の生態システムを構成させる。第6に、一旦登録できたら、雲南省の経済産業と文化産業の発展において麗江と同じく重要な役割を果たすことができる〔《梯田文化报》2000年9月25日〕。

遺産申請の進行に伴い、政府は元陽県内にある多依樹、壩達、牛角寨、猛品など4ブロック、約132平方キロメートル範囲の棚田地域を「遺産申請」の中心地域に指定した。さらに、棚田の世界文化遺産リスト登録にあたり、红河州政府は州全体のイメージアップを図るために、登録名称を数度にわたって変更した。史は元々「元陽ハニ棚田」という名称で申請しようと提起していた。一方、红河州政府は既に知名度の高い「红河」という名を持つ地元産のタバコ、「雲南紅」という红河州産のワイン、「红河ハニ棚田」を加え、三つのブランドを一緒に外部へ表象しようと考え、最終的に名称を「元陽ハニ棚田」から「红河ハニ棚田」へ変更し、公式な申請名称として国家文物局へ提起した。即ち、棚田はただハニ族のシンボルであるだけでなく、また红河州全域に広がる棚田は国内外でも注目されつつあり、世界を舞台に新しいイメージが生成されることを政府及び学者たちは期待している。

ただし、どんな登録名称を用いて登録するかをめぐって、異なる民族知識人の間に新たな争議を引き起した。「ハニ棚田」を世界遺産登録名称として提出する以前は、「誰の棚田であるのか」について、ほとんど論争は行われていなかった。一方、棚田が民族文化のシンボルとして、また红河地域の代表として、世界の舞台へ登場させられようとした時期から、ハニ族と同様に棚田を耕すそれ以外の、大勢の民族の知識人が異論を唱えるようになった。ハニ族の民族知識人は、世界遺産登録の名称を「哈尼梯田（ハニ族の棚田）」にすることは議論の余地もない当然のことであり、「ハニ棚田」とすべきだと主張した。しかし、同じく元陽に住み、棚田の耕作をしているイ族をはじめとする他民族の知識人からは、この名称に対して異論が唱えられた。「民族名＋棚田」にすべきか、それとも「地名＋棚田」にすべきかをめぐり、民族の間では、知識人を中心とし、今でも激論が交わされている。ただし、世界遺産登録名称をめぐる民族間の争議についての分析は別稿に譲りたい。

したがって、地方政府である红河州にとって、今までほとんど重視されていなかった棚

田に対し新しい価値を見出すことができ、また自らの文化を世界へ発信できるチャンスを得たと認識されたものと思われる。また、既に「世界文化遺産」として登録された雲南省の麗江と同じように、遺産リストに入ること自体が観光客を惹き付ける重要な要因となり、国内外の注目度も高まり、経済発展を促進させるという政府側の認識を促し、世界文化遺産への登録申請を駆り立てたとも考えられる。すなわち、遺産申請活動は非常に政治且つ経済にかかわる営為である。なお、棚田が、中国がユネスコに推薦する暫定リストに登録され、今も含まれていることは、申請活動の効果が見事に発揮されたといえる。2004年時暫定リストに入っていた他の4件（「マカオ歴史地域」、「広東開平の望楼と村落」、「福建土楼」、「河南安陽殷墟」）は、2008年までに世界遺産リストに登録されており、「ハニ棚田」も今後世界遺産リストに登録できるという希望が与えられ、今も申請活動を続けている。しかし、「ハニ棚田文化」は一体どこまでハニ族の文化を代表できるかどうかは疑問視される。また一括されているハニ族に属する「支系（サブ・グループ）」に関する民族の多様性がここでは省略されている。棚田を用いて、ハニ族における最大の文化要素を設定し、恣意的に特定民族に関する文化の一特徴を強調しているが、ほかの文化的な要素が無視される危険性を孕んでいると考えられる。

## 5. おわりに

以上で論じたように、「ハニ族」という「民族」自体は様々な問題点を残したまま、1950年代の「民族識別工作」によって創出されたものである。世界中でよく見かけられる田圃の一形態である棚田をある民族の独占物としなければならなかったことが、逆にハニ族を定める重要な境界指標が欠如していたことを物語っているとも言えよう。民族と棚田を結びつけたところにハニ族のエスニシティの特徴があり、それが逆に周囲の民族集団との対立を含めて、エスニシティの境界を結果的に際立たせているということになると思われる。

『哈尼族簡史』は編纂年代から考えると、ハニ族の概況を総合的にまとめた最初の書物であるだろう。この本に掲載されている歴史記録は初めてハニ族と棚田を結びつけ、ハニ族が棚田の創造者であることの正統な根拠とされている。『哈尼族簡史』が刊行されて以来、ハニ族に関する研究の中で最も多く繰り返し言われてきたことは、「和夷底績。厥土青黎、厥田惟下上、厥賦下中三錯。」であり、また「蛮治山田、殊為精好」である。しかし、こうした歴史文献による棚田の耕作歴史の再構成が、どこまで「事実」を反映したものであるかは確証できない。例えば、『尚書・禹貢』にある「厥土青黎、厥田惟下上」の「下上」は田圃の形を意味するものではない〔古2007：96-97〕。なぜなら「青黎」は「白壤」、「黒墳」、「黄壤」と並び土の性質を表すもので、「下上」もまた「中中」、「中下」、

「上上」と並び、土の品質を表す言葉だからである。そのほかに、「ハニ棚田」の主張者は、「蛮」＝「和蛮」（ハニ族の古称）、「夷」＝「和夷」という図式は完全に一致しているとは限らないという異論を認めているものの、「蛮」、「夷」のカテゴリーには「和蛮」、「和夷」、「土泥」などハニ族の先祖も含まれていると主張している〔毛 2000 : 19〕。すなわち、今の民族的、地理的な現状を歴史文献の記述に恣意的に当てはめ、巧妙に「ハニ棚田」を正当化してきたと言わざるをえないだろう。従って、『哈尼族簡史』に記述されている、民族知識人が恣意的に解釈した「厥田惟下上」、「蛮治山田、殊為精好」などは、歴史的な証拠としては十分な説得力を持っていないと思われる。

ただし、ハニ族の先祖が棚田を最初に開墾したという可能性は残されており、現在、ハニ族は紅河州において最大面積の棚田を有していることもまた事実である。それにもかかわらず、棚田の階段の数、棚田の耕作者の分布や人数の多さなどの理由からは、ハニ族が他の民族より最も優れている棚田の耕作者であることは必ずしも証明できない。それよりむしろ、西谷の研究で示されている通り、民族によって生み出された生業戦略の違いが見られるが、それは耕作技術の優劣とはいえないだろう。

ある視覚的な文化要素を特定の民族と結び付け、その民族のエスニシティと深く関連させる作法は、「棚田とハニ族」のみに見られる特有な事象ではない。例えば、福建省の円型土楼と客家〔瀬川 2001〕、風雨橋とトン族〔兼重 1998〕なども同じである。すなわち、その視覚的な文化要素がエスニック・シンボルとして創り出され、自民族のアイデンティティを強化させると同時に、明確な境界指標として他民族と区別されている。ここで特筆したいことは、その視覚的な文化要素を特有の民族の「伝統文化」として創生する担い手は往々その民族の知識人であるという点である。彼らは自民族への愛着心及び自らの知識により、「伝統文化」のもつ他には還元できない独自性と持続性を強調し、それを文字という形で固定化してしまい、研究成果として報告してきた。しかし、学者たちにより創出された「伝統文化」は、政府諸機関の参与を伴わない場合には、ただ学界内部の主張、或いは知識人間の論争といった段階に止まっている。つまり、創造された「伝統文化」が文化資源として利用されるには、往々にして政治的・経済的な要素の介入が欠かせないのである。

横山はペー族における「三道茶」の創造から規範化へのプロセスを検討し、民族文化の規範化は多数の主体と関わっていると述べている。政府諸機関に属する人々（「官」）、利潤を追求するビジネスに携わる業界に属する人々（「経」）、研究者ら（「学」）が寄り集まって、文化的事象について規範化を議論したり、或いは「伝統的」、「優れた」ものを選びとろうとする現象は、現代的な文化と政治・経済との関わりに見られる特徴的な営為である〔横山 2004 : 197〕。また、佐々木がロシア極東地域の事例を取り上げ、アムール川下流



域の先住民の間における民族的な帰属意識の形成は、民族学的な研究成果、そしてそれを利用した帝政ロシアやソ連の民族政策と関係しており、また先住民自身の意識の中で醸成されてきたものであると指摘している〔佐々木 2003 : 53-54〕。即ち、歴史的な意味では官・学・当事者という三者関係の中で、先住民のエスニシティ生成が起こると論じている。前述したとおり、学者たちの討論を通し、ハニ族の文化は、正統性を持ち、且つ優れた文化であると認められてきた。これはまさに「学」に属する研究者たちの営為である。そして、政府の世界遺産登録申請の活動にあたり、民族知識人の検証した「ハニ棚田文化」は学術的な根拠を備えるものと理解されるだろう。つまり、「官」に属する政府側の主導した申請活動を通して、元陽県において最も人口の多いハニ族にとって、棚田は新たに意味づけられ、且つ棚田の所有者がハニ族であることに対する有力なサポートともなっていると思われる。

1990年代後半から、雲南省における観光開発は盛んとなった。しかし、紅河州における棚田を観光資源とする観光開発は、雲南省のほかの地域に比べて、著しく遅れている。利潤を追求する「経」に属する観光業者は棚田の観光開発にまだ介入していない。なぜなら、観光業者にとって、現地民族の生活基盤である棚田はメジャーな観光地として商品化される価値がないと見なししてきた場所である。また、元陽を訪ねる観光者は殆ど棚田の写真を撮影するプロやアマチュアのカメラマンたちである。撮影旅行は従来のマス・ツーリズムと違い、新しい観光形態として観光業者の介入を避ける傾向にある。一方、同じ地域で棚田を耕作する「民」に属するハニ族、イ族、ヤオ族などの現地住民にとって、棚田は昔から現在に至るまで、生活の基盤であり、どの民族の独特のシンボルとなっているかといった意識をまったく持っていない。棚田はどの民族に属しているとは言えないが、しいて言えば、棚田を生活圏に含むすべての民族に属しているとも言えるだろう。棚田はハニ族という「民族」のラベルに貼りたてられ始めると、ある民族のシンボルとなり、エスニシティを備えるものとなった。

前述したように、これまで知名度の低かった棚田地域を「元陽ハニ棚田」、更に「紅河ハニ棚田」として銘打ってきたことが分かる。世界遺産登録を申請し、観光資源という実利的要素が介入することにより、それまで生業上の価値しかなかった棚田が新たな文化資源としての価値を獲得した。そして、それにもなって、政治的に「識別」され創出された民族が、その帰属をめぐる互いに争うことになった。棚田は単なる田圃から、一躍世界中の人々が注目する存在へと変身したのである。

## 注

(注 1) 王清華は雲南社会科学院に所属している研究員であり、漢族である。彼は 1983 年

—1984年まで、外部の学者として紅河州に入り、主に元陽県地域でフィールドワークを行った。ハニ族研究における代表者の一人である。

(注2) 彝族はもと「夷族」と表記されたが、清朝時代時代に漢族の王朝ではない満州人がこの呼称を嫌い、同じ音に「彝」の字をあてた。一方、いわゆる中華思想により中国を中心に、その周辺の異民族を北狄、西戎、東夷、南蛮とする呼び方がある。つまり、「蛮治梯田、殊為精好」の「蛮」は古代中国の南方にある漢族以外の異民族の総称であると解釈でき、ハニ族かイ族と断定することはできない。

(注3) 1992-1993年、ヤン・ラマが元陽で撮影した写真、及び写真に関する説明文を分析した結果によると、「ハニ族とイ族が棚田を耕作している」と明記されていたことが明らかになった。また、現在彼の撮影作品においては、管見の限りにおいて、ハニ族だけが棚田の耕作者であると限定した記録はまだ見受けられない。

(注4) このデータは多くの文章で見られたが、聞き取り調査によると、実際に数えたと称した人は史軍超しかいない。彼は世界遺産登録を申請するために一階段ずつ数えた。紅河川辺の五畝から元陽県の大魚塘村まで、3000階段以上に達したという。

## 参考文献

〈日本語〉

綾部恒雄 2002

「エスニシティ」、石川栄吉・梅棹忠夫など編『文化人類学事典』、103頁、弘文堂。

稲村務 1996

「アカ族・ハニ族・アイニ族—中国雲南省西双版纳州における「アカ種族」の国家統合過程」、東南アジア史学会編『東南アジア：歴史と文化』巻25、58-82頁。

稲村務 2002

「中国ハニ族の『支系』について——民族識別と『支系』概念の整理」筑波大学歴史人類学系編『歴史人類』第30号、159-186頁。

稲村務 2005

「ハニ族『文化』の政治学」、長谷川清・塚田誠之編『中国の民族表象——南部諸地域の人類学・歴史学的研究』、259-278頁、風響社。

加々美光行 1992

『知られざる祈り——中国の民族問題』、新評社。

兼重努 1998

「エスニック・シンボルの創成——西南中国の少数民族トン族の事例から」、『東南アジア研究』35巻4号、132-152頁。

栗原悟 1989

「社会変動のなかの少数民族」、宇野重昭編『岩波講座・現代中国：静かな社会変動』3巻、286-312頁、岩波書店。

佐々木史郎 2003

「ロシア極東地方の先住民のエスニシティと文化表象」、瀬川昌久編『文化のディスプレイ——東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』、49-68

- 頁、風響社。
- 瀬川昌久 2001  
「福建省南西部地域における客家と円型土楼」、『東北アジア研究』第5号、1-25頁。
- 西谷大 2007  
「灌漑システムからみた水田稲作の多様性——雲南国境地帯のタイ、アールー、ヤオ族の棚田を事例として」、『国立民俗歴史博物館研究報告』第136集、335-378頁。
- 毛里和子 1998  
『周縁からの中国——民族問題と国家』、東京大学出版会。
- 元木靖・ビラルディン＝ニザム 2003  
「ハニ族の棚田——中国・雲南省元陽県の事例研究」、『埼玉大学紀要』39(2)、181-206頁。
- 本中真 1997  
「フィリピン・イフガオ地方の高地性棚田景観（特集棚田）」月刊『文化財』(1)：33-41頁。
- 横山廣子 2004  
「観光を中心とする経済発展と文化——雲南省大理盆地の場合」、横山廣子編『少数民族の文化と社会の動態——東アジアからの視点——』、181-203頁、国立民族学博物館。
- 〈中国語〉
- 費孝通 1988  
“关于我国民族的识别问题”《民族研究文集》、158-187頁、民族出版社（原载《中国社会科学》1980年1期）。
- 哥布 2001  
《大地雕塑——哈尼梯田文化解读》、云南人民出版社。
- 古永继 2006  
“哈尼族研究中史误的三点辨正”、《民族研究》2007年第3期、96-110頁。
- 《哈尼族简史》编写组 1985  
《哈尼族简史》、云南人民出版社。
- 《红河州年鉴》编辑委员会 2006  
《红河州年鉴（总第12卷）》、云南大学出版社。
- 黄绍文 2007  
《诺玛阿美到哀牢山——哈尼族文化地理研究》、云南民族出版社。
- 角媛梅 2003  
“哈尼族文化区的特征——哈尼梯田文化景观”《云南地理环境研究》15(1)、51-56頁。
- 李期博 2000  
“论哈尼族梯田稻作文化”、红河州哈尼学学会论《哈尼族梯田文化论集》、1-17頁、云南民族出版社。
- 林耀华 1984

- “中国西南地区的民族识别”、《云南社会科学》第2期、1-5页。
- 林成贵 2005  
“地方媒体对哈尼文化传播作用的思考”李期博主编《第四届国际哈尼/阿卡文化学术讨论会论文集》、404-409页、云南民族出版社。
- 刘茁生·王寅生·杜玉亭（整理） 1963  
“元阳马街彝族社会调查”、中国科学院民族研究所云南民族调查组、云南省民族研究所编《云南彝族社会历史调查（彝族调查资料之一）》、227-241页。
- 毛佑全 2000  
“哈尼族梯田农耕文化与生态系统”、红河州哈尼学学会编《哈尼族梯田文化论集》、18-33页、云南民族出版社。
- 史军超 2001  
“大山里塑成的奇迹——元阳哈尼梯田申报世界遗产”、《今日民族》第4期、4-10页。  
《彝族简史》编写组 1987  
《彝族简史》云南人民出版社。
- 云南省红河哈尼族彝族自治州志编纂委员会 1997  
《红河哈尼族彝族自治州志·卷一》、生活·读书·新知三联书店。
- 王清华 1999  
《梯田文化论》、云南大学出版社。
- 王尔松 2005  
“哈尼族梯田与水文化”李期博主编《第四届国际哈尼/阿卡文化学术讨论会论文集》、1-19页、云南民族出版社。
- 张文·王声跃 2006  
“云南少数民族获食模式探讨”、《人文地理》2006年第4期、106-108页。
- 宗晓莲 2006  
《旅游开发与文化变迁——以云南省丽江市纳西族文化为例》、中国旅游出版社。

表 1 棚田の世界遺産登録申請経緯

時期	主な出来事
1995 年 10 月	ハニ族の学者史軍超とフランス人の学者が初めて申請の話をした。
1999 年 1 月	史軍超が棚田を世界遺産リストに登録しようとアドバイスした。
1999 年 3 月 25 日	『棚田文化報』に史軍超のアドバイス論文を掲載した。
2000 年 2・6 月	『元陽ハニ族棚田の世界遺産への申請計画』などの計画が提出された。
2000 年 10 月 30 日	紅河ハニ棚田が世界遺産登録の件を、紅河州政府が正式に上級の雲南省政府へ報告した。
2001 年 1 月	紅河州政府は「紅河ハニ棚田の世界文化自然遺産への登録申請事務室」を設立した。
2001 年—2002 年	棚田の管理と保護に関する幾つかの具体案を打ち出して、元陽の棚田を世界文化遺産に登録するための準備に取り組んだ。
2004 年 6 月	「紅河ハニ棚田」は「マカオ歴史地域」、「広東開平の望楼と村落」、「福建土楼」、「河南安陽殷墟」とともに、中国から世界遺産委員会へ提出する申請暫定リストに入ることとなった。
2006 年年末	中国国家文物局が改めて全国的に調査し検討を重ね、新たに 35 件を世界遺産申請暫定リストとして公布した。「紅河ハニ棚田」は新しい暫定リストに含まれた。
2007 年 9 月	「世界遺産申請事務室」が「ハニ棚田管理局」に格上げされた。

図1 元陽県の位置づけ



写真1 ハニ族の人々が棚田を開墾している風景



(撮影者：王清華、1983-1984 年撮影)

写真2 元陽県・多依樹ブロックの棚田



(撮影者：ffun、撮影場所：多依樹、2005 年 3 月撮影)



写真3 紅河州金平県のヤオ族の耕作風景



(撮影者：戴云良、撮影場所：紅河州金平県、2006年5月撮影)

写真4 元陽県・猛品ブロックの景観



(撮影者：fifun、撮影場所：猛品、2004年3月撮影)